

# スウェーデンにおけるインクルーシブ教育と 肢体不自由（移動障害）教育の動向

石井智也<sup>1</sup>・石川衣紀<sup>2</sup>・田部絢子<sup>3</sup>・池田敦子<sup>1</sup>・高橋智<sup>4</sup>

（1：東海学院大学人間関係学部子ども発達学科、2：長崎大学教育学部、  
3：金沢大学人間社会研究域学校教育系、4：日本大学文理学部教育学科）

## 要 約

本稿ではスウェーデンのインクルーシブ教育における肢体不自由（移動障害）教育の動向について検討した。スウェーデンではインクルーシブ教育が促進されており、肢体不自由児も就学前学校・基礎学校・高校の通常学級での学習が原則とされているが、実際には就学前特別学校、基礎学校肢体不自由特別クラス、基礎学校肢体不自由ユニット、スウェーデン特別ニーズ教育庁が管轄する国立肢体不自由特別高校（全国に4校設置）も必要不可欠なリソースとして維持・整備されている。高度な福祉国家といわれるスウェーデンにおいても肢体不自由児が学校生活や卒業後の生活で差別・困難を強いられている実態も明らかにされてきており、特に障害が重い子ども・若者の学校教育や卒後の進路保障は大きな課題として残されている。そうした問題状況に対して、例えば肢体不自由当事者組織は「肢体不自由生徒は他の生徒と同じ教育へのアクセス権を持つべきである」「肢体不自由により学校の選択を決して制限してはならない」等の意見を表明している。このように当事者組織がスウェーデンの肢体不自由の子ども・若者が抱えている学校生活や卒業後の生活の差別・困難をどのように批判し、打開していくのかについて引き続き注目していきたい。

キーワード：スウェーデン、肢体不自由（移動障害）教育、インクルーシブ教育、国立肢体不自由特別高校、基礎学校肢体不自由特別クラス・ユニット

## 1. はじめに

筆者ら「北欧福祉国家と子ども・若者の特別ケア」研究チーム（代表：高橋智日本大学文理学部教育学科教授・東京学芸大学名誉教授）は、これまで四半世紀にわたり、北欧福祉国家（スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド）における多様な発達困難を有する子ども・若者の発達支援・特別ケアのあり方について調査・検討を行ってきた。

今回、本稿で取り上げるのはスウェーデンのインクルーシブ教育における肢体不自由（移動障害）教育の動向についてである。この主題を取り上げる理由は、福祉国家スウェーデンは先駆的にノーマライゼーション・インクルージョンの理念のもとにインクルーシブ教育を促進しているが、一方で知的障害・聴覚障害・重度重複障害等の場合には特別な教育の場も維持されている。それでは肢体不自由教育についてはどうか。実は、近年のスウェーデンのインクルーシブ教育のもとでの肢体不自由教育の動向については十分に明らかになっておらず、それゆえに本稿で検討するものである。

さて、スウェーデンにおいて肢体不自由に該当する用語は「rörelsehinder」（直訳すると移動障害、「RH」と略称）または「rörelsenedsättning」（直訳すると移動機能低下）が該当する。日本と同様にスウェーデンでもこの用語はいくつかの疾患名の総称とされており、原因疾患として脳性麻痺（cerebral pares）、二分脊椎（ryggmärgsbråck）、神経筋疾患（neuromuskulära sjukdomar）、後天性脳損傷（förvärvad hjärnskada）、リウマチ性疾患（reumatiska sjukdomar）などがあげられている。

なお、以下の記述においては、肢体不自由（移動障害）は肢体不自由、肢体不自由（移動障害）教育は肢体不自由教育と表記する。

## 2. スウェーデンの肢体不自由教育の歴史的経緯

石田（2003）によるとスウェーデンにおける肢体不自由教育の系譜は、創設当初から肢体不自由児の教育と訓練指導を取り入れてきた「オイギニアヘメット

（Eugeniahemmet）」と、肢体不自由協会による活動の一環としての施設内学校の二系統に大別できるとされる。

オイギニアヘメットは 1882 年にストックホルムに開設されたスウェーデン最初の肢体不自由児施設である。1879 年にオウゲニー王女が「貧困な肢体不自由児」のための慈善事業組織を設立したことに基づく。12 名の子どもへの教育活動から始まり、1886 年にノルバッカへ移転後は内反足・ポリオ・くる病やその他の事故による肢体不自由児が指導を受けていた。

ノルバッカに移転した際に整形外科診療所も設けられ、補助具の使用と訓練指導が重視された。その後、20 世紀初頭には寄宿生・通学生合わせて 200 名がここで指導を受けるようになっていたが、退所後は別の収容保護施設に収容され、その他の子どもは施設に残留するという問題点も浮上していた。



図 1 オイギニアヘメットの庭で並ぶ子どもたち

(<https://digitaltmuseum.se/021018599834/handikappade-barn-med-kryckor-och-proteser-pa-sjukhusgarden-eugeniahemmet>)

一方、スウェーデンにおける肢体不自由協会は、デンマークの伝道師クヌーゼン（Kunudsen, H.）が 1872 年にコペンハーゲンに肢体不自由協会を設立して活動を開始したことに影響を受け、1885 年にヨーテボリ肢体不自由者援助協会が結成されたのが最初である。その後、1885 年にカールスクローナ肢体不自由・身体障害者援助協会、1887 年にスコーネ肢体不自由者援助協会、1891 年にストックホルム肢体不自由・身体障害者援助協会が結成された。

これらの協会では青少年を対象とした職業学校（16～18 歳で入学）が設けられ、当初は通学制のみであったが、のちに寄宿制も導入された。協会による学校は当初、若者が対象で学齢児は含まれていなかったが、1911 年～

1912 年にかけてのポリオの流行を要因として、協会が学齢児対象の施設内学校を 1915 年～1916 年にかけて開設した（石田：2003）。

初のリハビリテーションセンターがウプサラに設立されたのは 1884 年であり、肢体不自由者の学校・施設・組織の調整のために「肢体不自由者の保護のためのスウェーデン中央委員会」が 1911 年に設立された。1952 年には同委員会の主催で脳性まひ児の親のための勉強会が始められ（小川ら：1994）、1958 年に民間慈善団体の「Bräckediakonia」によってヨーテボリに脳性まひ児のための居住施設「Bräcke Östergård」が誕生し、当初は就学前の子どもを対象としていたが、1961 年に肢体不自由特別学校が併設された。



図 2 Bräcke Östergård の概観

（出典：Johansson, S. E. : 2009）



図 3 完成した肢体不自由特別学校の様子

（出典：Johansson, S. E. : 2009）

1962 年、「国内に居住する児童は基礎学校における教育の権利を有する」と規定した「学校教育法」が制定され、肢体不自由児の義務教育がようやく法的に保障された。

従来の教育組織を一新した学校教育法および基礎学校の学習指導要領 Lgr62 では、「脳性まひ学級」が新たに加えられた。1965 年、「身体障害児等のための生徒寮に関する法律」の成立により、コミューンは身体障害児に対して基礎学校や特別学校（寮制度）で教育を提供しなければならない（第 1 条）ことや、身体障害児のニーズに応じたサービスの提供をしなければならない（第 2 条）ことが規定され、身体障害児に対して学校で支援するパー

ソナル・アシスタンスサービスが提供されるようになった（清原：2020）。

1965年には「肢体不自由児の保護・教育問題に関する提議」が国会で可決された。この提議は肢体不自由児の教育をできるだけ基礎学校で行うことや寄宿舎の整備、基礎学校の特別指導の整備について指摘すると同時に、基礎学校就学が困難な肢体不自由児の場合にはコミュニケーションや国による通学制または寄宿制の特別学校で行うとするインテグレーション原則と特別学校の二つの側面を有するものだった。しかし、特別学校は脱中央集権化と小規模学校設置の原則に規程されており、コミュニケーションによっては基礎学校に肢体不自由児学級（「RH学級」等と呼ばれた）を併設する手段もとられていた（石田：2003）。

1970年代の半ば頃には、基礎学校の少なくとも4分の1の子どもが何らかの特別な取り扱いを受けていた。彼らは通常の授業についていくのに困難があるため、または言語障害や肢体不自由のため特別な指導の必要性を認められていた（カール G.アールストレームほか：1995）。

1978年にはインテグレーション検討委員会が設立されたが、同委員会の報告では1978年段階で肢体不自由児が義務教育段階で約2,600名、後期中等教育段階で約500名であり、これらの肢体不自由児のうち80%が通常学級で統合教育を受けていた。1992年には90%にまで上昇しており、残る8%が特別学級、2%が地域のハビリテーションセンター併設の特別学級在籍である。肢体不自由特別学校としては前述のBräcke Östergårdの1校のみであり、そこには病院・施設・国立教材センターが併設されていた（小川ら：1994）。

### 3. スウェーデンにおける肢体不自由児教育の現状

スウェーデンでは知的障害特別基礎学校・特別高校、聴覚障害を対象とする国立の特別学校があるが、視覚障害や肢体不自由を有する子どもは原則として通常学級において教育が行われる。学校法第3条(skollagen:2009)に定められているように、スウェーデンの基礎学校・高等学校では肢体不自由に限らず特別な支援が必要である子どもに対して、学校長は彼らの教育的ニーズの把握に努め、学習や作業のサポート、ICT等での支援などの追加の適応サポートに加えて、行動プログラム(åtgärdsprogram)の作成とともに特別なサポート(särskilt stöd)を実施することが定められている。

肢体不自由児の支援に必要となる車椅子やICT機器の提供は、ハビリテーションセンターと補助器具センターとの連携によって円滑に実施されている。特別なサポートは、子どもの教育的ニーズに応じて特別教育家(specialpedagog)による長期に渡る教育支援、特別ユニットへの配置、個別指導などが実施されており、肢体不自由児については通常学級における個々のニーズに応じた支援とともに、肢体不自由特別クラス(RH-klass)や特別ユニットが編制可能な場合にはそこの支援が実施される。

なお、肢体不自由児であっても知的障害を有していると判断される場合には、知的障害特別基礎学校(grundsärskola)での教育支援が実施される。高等学校段階においても通常の高等学校の他、スウェーデン特別ニーズ教育庁(Specialpedagogiska skolmyndigheten, SPSM)が管轄する「国立肢体不自由特別高校(riksgymnasiet för rörelsehindrade)」(全国に4校設置)への進学、もしくは知的障害を有していると判断される場合には知的障害特別高校(gymnasiesärskola)に進学するケースも少なくない。

スウェーデンにおける肢体不自由児の実態調査は豊富ではないが、「スウェーデンの機能障害のある子ども・若者協会(Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar, RBU)」が2011年に肢体不自由を中心とした機能障害を有する子どもを対象とした調査を実施している(Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar:2011)。それによると基礎学校段階の機能障害を有する子どもの約59%が基礎学校に就学、約36%が知的障害特別基礎学校、約5%が特別学校(specialskola)に就学していることが示されており、少なくとも肢体不自由児が知的障害特別基礎学校で学んでいることがうかがえる。

一方、基礎学校に就学している機能障害を有する子どものうち、約62%の子どもが通常学級、約22%は肢体不自由等に応じた特別ユニット、約16%が肢体不自由特別クラス(RH-klass)で学んでいることが示されており、基礎学校に就学している機能障害を有する子どもの半数以上が通常学級で学んでいる。

学校での特別なサポートは調査対象者の約42%が必要とする支援を受けていないと回答し、約40%が子どものための行動プログラムが策定されていないと回答するなど、基礎学校における教育支援が肢体不自由児の教育的ニーズに十分に応じていないことが示唆される。

2008 年に報告されたスウェーデン学校教育庁 (Skolverket : 2008) による機能障害を有する子どもの学校へのアクセシビリティに関する調査では、基礎学校の通常学級から特別ユニットに移動した機能障害を有する子どもへの聞き取りを実施しているが、車椅子を常用する肢体不自由児に対して通常学級では学校生活における適切な支援がなされておらず、自分たちに適した少人数クラスでの学び、ニーズに応じた教育支援を求めて特別ユニットへの移動を希望したことが示されている。

こうした実態調査からも、基礎学校においては肢体不自由児の抱える多様な困難・ニーズに応じた支援が十分になされていないことが想定される。

#### 4. スウェーデンにおける肢体不自由教育の実際

スウェーデンの肢体不自由児は通常の就学前学校・基礎学校・高校の通常学級のほか、就学前特別学校、基礎学校肢体不自由特別クラス (RH-klass)、基礎学校肢体不自由ユニット (RH-enheten)、スウェーデン特別ニーズ教育庁が管轄する「国立肢体不自由特別高校 (riksgymnasiet för rörelsehindrade)」(全国に 4 校設置：ストックホルム、ヨーテボリ、ウメオ、クリスチヤンスタッド) において教育を受けているが、以下、その概要について紹介する。

##### 1) 就学前特別学校における肢体不自由教育

スウェーデンでは「就学前学校のためのカリキュラム (Lpfö18)」によって、就学前学校 (förskolan) に対して「就学前学校の環境は、すべての子どもたちにさまざまな状況でさまざまな活動を提供する必要がある」としており、基本的には障害のある子どもも統合された環境の中で生活する。このカリキュラムを踏まえつつ、自治体によっては「就学前特別学校 (specialförskolor)」を設けている場合もある。

ヨーテボリ市では重複障害・難聴・言語障害・自閉症の子どもためにそれぞれの就学前特別学校を設置しており、このうち重複障害児の就学前特別学校 (全 3 校) が肢体不自由児の受け入れを行っている。

その一つである「ウェランデルガタン 37 就学前学校 (Welandergatan 37 förskola)」は「身体的および知的の両方で広範囲の障害をもつ子ども」のための就学前特別学校である。就学前学校の国家カリキュラムをベースとしながら障害特性に応じたコミュニケーション支援やハビ

リテーションが提供される。スタッフは就学前教師、ベビーシッター (barnskötare、就学前教師と協働して乳幼児の活動を保障する専門職)、特別教育家で構成されている。

全ての子どもについて運動技能とコミュニケーションを中心とした個別活動計画が作成され、「教育的プロフィール (pedagogisk profil)」と称されている。この個別活動計画は保護者やハビリテーション専門職などの他職種とともに作成・確認され、子どものリソースを個別にまたはグループで開発することに焦点が当てられている。子どもの多くには運動障害があり、補助器具なしで動くことが困難であるため、スタッフは通常、子どもの個別の運動プログラムに沿って活動している。それらは子どものニーズに合うように、理学療法士が中心となって作成する。

ウェランデルガタン 37 就学前特別学校では教育活動としてコミュニケーションを重視している。子どもは多様な方法でコミュニケーションをとるが、教師・スタッフは子どもが示す笑顔などの顔の表情、ボディランゲージ等のコミュニケーション方法についての解釈を相互に検討しながら、実践に取り組んでいる。

主な活動内容としては、温水プールで泳ぐ、歩行補助器具を使用しながら立位をとる、触覚マッサージ、スイング、粘土を塗って感じる、歌と音楽、焼き物、車いすダンス、感覚刺激、野外活動、アッカプラッタ (Akka-platta) がある。アッカプラッタとは板状に作られた移動のための補助器具であり、床に張り巡らされた黒いテープの上を電子制御で進んでいく。従来の車椅子の運転と操舵が困難な子どもや大人でも操作ができるようにされている。



図 4 温水プールにおける運動プログラム

(ウェランデルガタン 37 就学前特別学校ウェブサイトより)

また施設整備も充実しており、リラクゼーションを目的としたスヌーズレン (ホワイトルーム)、トランポリン、ボールプール、子ども用マッサージルームなどが完備されている。屋外には芝生のあるアトリウムの中庭、様々

な匂いや味を感じられる植物、様々な身体活動を楽しめる道具がついた壁面などが配置されている。さらに子どもに合わせたブランコと立った高さでも使える砂場があり、子どもの可能な立位・座位に応じて使用することができる。また農場も有しており、屋外環境で感覚的な体験を提供できるように絶えず開発されている。

保護者は就学する際に特別食についての申請書を一緒に提出することができる。なおヨーテボリ市内のすべての学校では食物アレルギー回避の観点から、ナッツ・ピーナッツ・アーモンド・ゴマの4種について提供を禁止している。

表1 特別食の申請書

子どもが以下の過敏症／アレルギーをもっています <input type="checkbox"/> 乳糖 <input type="checkbox"/> 乳糖を含まない飲み物のみ必要 <input type="checkbox"/> 乳たんぱく質 <input type="checkbox"/> グルテン／セリアック病 <input type="checkbox"/> シリアル (具体的に: ) <input type="checkbox"/> 魚 <input type="checkbox"/> 卵 <input type="checkbox"/> 大豆たんぱく質 <input type="checkbox"/> マメ科植物 (インゲン、エンドウ、レンズ) (具体的に: ) <input type="checkbox"/> 生トマト <input type="checkbox"/> ゆでトマト <input type="checkbox"/> 生にんじん <input type="checkbox"/> ゆでにんじん <input type="checkbox"/> 生ピーマン <input type="checkbox"/> ゆでピーマン <input type="checkbox"/> 果物 (具体的に: ) <input type="checkbox"/> ベリー (具体的に: ) <input type="checkbox"/> その他 ( ) 医学的理由 <input type="checkbox"/> 糖尿病の食事療法 <input type="checkbox"/> 医学的理由によるその他の食事 ( ) 深刻な急性の問題・リスクはありますか？ <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ 「はい」の場合、何に対してですか？ ( ) 子どもが間違った食事を摂取した場合、緊急薬を服用していますか？ <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ 「はい」の場合、薬の内容 ( ) 特別食は医師の勧めですか <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ 医学的理由以外で必要な特別食 <input type="checkbox"/> 豚肉を外す <input type="checkbox"/> ヴィーガン食 <input type="checkbox"/> ラクトベジタリアン食 <input type="checkbox"/> ラクトオボベジタリアン食 <input type="checkbox"/> +魚 (上記のベジタリアンオプションのいずれかにチェックをつけたうえで)
---

(ウェランデルガタン37 就学前特別学校ウェブサイトより)

ストックホルム市においては、知的障害に加えて肢体不自由・てんかん・聴覚障害・視覚障害のいずれかを重複している子どものために「ライマー就学前特別学校 (Reimers specialförskola)」を1校設置しており、ストックホルム市全体から子どもを受け入れている。スタッフ構成は就学前教師、ベビーシッター、特別教育家、理学療法士、作業療法士、副校長および校長である。子どもの数は16名であり、子ども1名あたりスタッフ1.25

名の割合である。

ライマー就学前特別学校では「運動技能と移動」「感覚と知覚」「コミュニケーションと相互作用・社会的能力」「日常生活」の4つの主題にもとづく教育を行っており、その土台として子どもの遊び、好奇心、動き、感覚を刺激し、挑戦するためのさまざまなニーズを念頭に置いた環境設計がなされている。感覚刺激の教育環境として、特にブランコ、砂場、挑戦と体験のための「立っている砂場 (ståsandlåda)」がある園庭が設計されている。また付近の遊び場や公園を利用する場合もある。

## 2) 基礎学校における肢体不自由特別クラス・ユニット

スウェーデンでは子どものニーズに応じて様々な形態で学びを保障することが明確化されており、特別なグループについては「基礎学校条例 (Grundskoleförordning 1994:1194)」の第5章5条において明記されている。

表2 肢体不自由特別クラス・ユニットが設置されている基礎学校

ストックホルム市	スキャンスクヴァーン基礎学校 (Skanskvarnsskolan)
ウメオ市	オーリッドヘム基礎学校 (Ålidhemsskolan)
ノルシェーピング市	エネビー基礎学校 (Enebyskolan)
リンシェーピング市	エーコルム基礎学校 (Ekholmsskolan)
リンシェーピング市	フレードリクスベリ基礎学校 (Fredriksbergsskolan)
ゾーレントゥーナ市	トゥーレベリ基礎学校 (Turebergsskolan)
エーレブロ市	アドルフベリ基礎学校 (Adolfsbergsskolan)

ウメオ市の場合、オーリッドヘム基礎学校 (Ålidhemsskolan) に6～9年生対象の肢体不自由特別クラス (RH-klass) が設けられている。クラス編制は最大10名とされ、その中でさらに小グループ指導が中心となる。RHクラスの子どもは、自分の希望に応じて、1つまたは複数の科目で通常クラスに統合して授業を受けることができる。この場合は必要に応じてアシスタントが授業に同行し、支援を受けることができる。



図5 オーリッドヘム基礎学校 (Älidhemsskolan)

ストックホルム市のスキャンスクヴァーン基礎学校 (Skanskvarnsskolan) において編制されている肢体不自由クラス (RH-klasse) は、地域のハビリテーションセンターと協力しながら授業中に機能訓練に取り組み、少人数教育を通して子どもの多様な困難に応じた教育支援が実施されている。在籍している子どもの多くは発音・発語に困難、ワーキングメモリーの特性により用語や単語を覚えたりすることに困難を抱えるために、AAC（補助代替コミュニケーション）を導入するなどして、丁寧な学習支援が実施されている。

在籍している子どもが肢体不自由クラスで学ぶ利点として、トイレや食事のサポートをするアシスタントがいること、エレベーターやトイレが近くにあること、日中にハビリテーションに関わる支援を受けて、放課後はゆっくりと休憩できることなどを挙げており、肢体不自由特別クラスでは肢体不自由児のニーズに応じた取り組みがなされている。



図6 スキャンスクヴァーン基礎学校肢体不自由クラスの様子  
(Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar  
(2011) Årsrapport 2011, p. 22)

ノルシェーピング市では「エネビー基礎学校 (Enebyskolan)」に肢体不自由ユニット (RH-enheten)

が設置されている。このユニットは肢体不自由に限らず他の障害のある子どもにも教育とハビリテーションを提供するコミュニティ全体のリソースとして設置されている。

子どもは全員通常クラスに在籍し、必要に応じてこのユニットでも教育を受けることができる。エネビー基礎学校は施設全体が肢体不自由児に適した設計がなされ、平屋建て、天井リフト、リフティングテーブル、障害者用キッチン、改造トイレなどが設置されている。

リンシェーピング市の「フレードリクスベリ基礎学校 (Fredriksbergsskolan)」には 1989 年から肢体不自由ユニット (Särskild undervisningsgrupp för elever med rörelsenedsättning) が設置されており、少人数グループでの教育支援が実施されている。肢体不自由ユニットと通常学級の子どもの良好な関係構築が目ざされ、脳性マヒ等により言語障害のある子どもには AAC（補助代替コミュニケーション）の導入、シンボルの利用が取り組まれている。こうした肢体不自由児の教育支援は、地域のハビリテーションセンターやスウェーデン特別ニーズ教育庁との協働の下、特別教育家、教師、アシスタントによって実施されている。

またリンシェーピング市の「エーホルム基礎学校 (Ekholmsskolan)」でも「フレードリクスベリ基礎学校 (Fredriksbergsskolan)」との協働で肢体不自由ユニット (Särskilda undervisningsgrupper Ekholmsskolan) を開設しており、言語障害を併せ持つ子どもへの AAC（補助代替コミュニケーション）の活用、アダプテッドスポーツの採用、読み書きが困難な子どもに対して ICT の活用などの取り組みが実施されている。

ソーレントゥーナ市の「トゥーレベリ基礎学校 (Turebergsskolan)」には肢体不自由ユニットが開設されている (RN-enheten Turebergsskolan)。肢体不自由ユニットでは少人数での個別指導の実施とともに、ソーレントゥーナ子どもハビリテーションセンターに所属している理学療法士・作業療法士・言語聴覚士がハビリテーションチームを組んで学校に常駐する支援体制が敷かれていることが特徴である。

### 3) 国立肢体不自由特別高校 (riksgymnasiet för rörelsehindrade)

肢体不自由児への高校レベルの教育は、1979 年までは身体障害者施設で行われており、この取り組みを継承する形で国立肢体不自由特別高校が設置されている（二文字：2019）。

スウェーデン教育法 (Skollag 2010:800) の第 15 章は高校教育に関する章であり、このうち第 35 条から第 40 条までが「Rh 適応教育」についての条文となっている。第 35 条では肢体不自由 (rörelsehindrar) の定義として「単独または他の障害と重複して、若者が、①高校教育プログラムを受講できるようにするために『Rh 適応教育』を受けられる学校にアクセスする必要がある状態、かつ②寮または自宅でハビリテーションや看護が必要な状態」と記述されている。

第 36 条では重度肢体不自由のある若者に対して、「肢体不自由に適合した教育 (Rh-anpassad utbildning)」に対応した国立特別高校で教育を受ける権利について定めている。国立特別高校へ出願するためには入学審査をクリアする必要があること、重度肢体不自由があること、ハビリテーションが必要であること (場合により寮生活を含む)、基礎教育段階またはそれと同等の教育を修了していること、21 歳になった年の最初の暦学期までに教育を開始できること、高校教育の各プログラムにかかる資格要件を満たしていることなどが求められる。ハビリテーションや寮生活にかかる費用はすべて入学者の居住コミュニティが負担する (第 40 条)。



図 7 国立肢体不自由特別高校 4 校を表すロゴ

国立肢体不自由特別高校への入学申請には定められた書式を提出する必要があること、基本となる入学申請書のほか、在籍基礎学校の責任者による教育的所見、在籍基礎学校が最後に発行した個別アクションプログラム、ハビリテーションマネージャーによるハビリテーション所見、ハビリテーション計画の写し、運動障害に関する診断書、秋学期の成績証明書、身分証明書が求められている。

入学申請書には、①個人情報、②希望する入学先 (4 校

から 1 つ選択し、選択理由を記述)、③希望する高校教育プログラム、④寮の希望、⑤障害の状態 (屋内での移動方法、屋外での移動方法、腕と手の機能状態、障害の重複の有無)、⑥補助器具、⑦学習形態のニーズ (小グループ、アシスタント、カスタム教材、ゆっくりした教育進度、追加の教育支援、デジタル機器、その他)、⑧ハビリテーションに求める専門職 (理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー、心理士、医師・看護師、言語聴覚士、栄養士) の記入欄が設けられ、申請者のニーズを把握するための質問紙となっている。

提出された申請書類にもとづいて「特別学校への入学と Rh 適応教育のための委員会」が、各申請者が入学基準を満たしているか否か、学生寮利用の必要性について評価および決定する。この委員会は特別ニーズ教育庁に設置された特別な意思決定機関であり、スウェーデン雇用者庁元長官、「国立盲ろう者問題ナレッジセンター (Nationellt kunskapscenter för dövblindfrågor)」スタッフ、心理士、弁護士、ハビリテーションマネージャー等から構成されている。同委員会が国立肢体不自由特別高校への入学を許可しなかった場合に、申請者は「スウェーデン学校控訴委員会 (Skolväsendets överklagandenämnd)」へ異議申し立てを行う仕組みも用意されている。

さて、スウェーデンの高校教育は大学進学プログラム (全 7 課程)、職業訓練プログラム (全 13 課程)、入門プログラム (全 4 課程)、独自学位プログラム (全 5 課程)、知的障害特別高校プログラム (全 2 課程) から構成されている。これにもとづいて国立肢体不自由特別高校 4 校では大学進学プログラム・職業訓練プログラム・入門プログラムのなかからそれぞれいくつかの課程を構成しており、課程が求める科目の成績認定も必要となる。

例えば、大学進学プログラムの場合はスウェーデン語、英語、数学、および少なくとも 9 つの科目で承認された成績を持っている必要がある。職業訓練プログラムの場合はスウェーデン語、英語、数学、および少なくとも 5 つの科目で承認された成績を持っている必要がある。大学進学プログラムまたは職業訓練プログラムのいずれの資格も満たしていない場合は、入門プログラムに出願することができる。

表3 国立肢体不自由特別高校のプログラム

学校名	プログラム
国立肢体不自由特別高校ストックホルム校 RgRh Stockholm	芸術プログラム（大学進学） 社会科学プログラム（大学進学） 個別プログラム（入門） 聖エリク高校に統合されており、聖エリク高校のプログラムやストックホルム市内の他の高校のプログラムを選択することができる。
国立肢体不自由特別高校ヨーテボリ校 Riksgymnasiet för rörelsehindrade Göteborg	芸術プログラム（大学進学） 個別プログラム（入門） アンジェレド高校に統合されており、ヨーテボリ市内の各高校のプログラムに参加することができる。
国立肢体不自由特別高校ウメオ校 RH-gymnasiet Umeå	ウメオ市内の各高校で提供されているすべてのプログラムに参加可能。ドラゴン高校に統合されている。
国立肢体不自由特別高校クリスチャンスタッド校 Riksgymnasiet i Kristianstad	社会科学プログラム（大学進学） 芸術プログラム（大学進学） 貿易管理プログラム（職業訓練） レストランと食品プログラム（職業訓練） 電気とエネルギープログラム（職業訓練） 個別プログラム（入門） クリスチャン 4 世高校に統合されており、クリスチャンスタッド市内の高校のプログラムに参加することができる。

国立肢体不自由特別高校 4 校に共通した特徴は、同じ敷地内に通常の高校が位置的統合されており、そのプログラムを選択できるほか、コミュニーの他の高校で開設されているプログラムも選択できることである。国立肢体不自由特別高校の生徒は寮生活が基本のため、離れた高校のプログラムに出席する場合には寮から無料送迎サービスを活用する。



図 8 国立肢体不自由特別高校クリスチャンスタッド校  
Om skolan - Kristianstads kommun

国立肢体不自由特別高校は基本的に 4～8 名の少人数指導形態である。特別高校ではハビリテーションが必須となっており、対応する専門職として理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・心理士・キュレーター（ソーシャ

ルワーカー）が常駐している。

各校には「生徒アシスタント」と呼ばれる支援スタッフが配置され、生徒の日常生活や学習生活全般をサポートしている。高校の教室へ参加して、学習環境構造化の支援、読み書きの支援、視覚的支援などを実施する。その他、インターンシップ、スタディービジット、スタディートリップ、タクシー予約、食事など、様々な場面で支援を行う。

寮は学校の近くまたは市内中心部に設置されており、徒歩圏内に駅、スーパーマーケット、薬局、レストラン等がある。居住支援スタッフが 24 時間常駐しており、状況に応じて必要な支援を提供する。生徒はここで食事を作ることもできる。自宅と学校の間の移動時間が 1 日 2 時間以上の場合や障害や家庭事情によって通学が困難な場合に入寮の許可が得られるが、国立特別学校が数少ないため、実際には多くの生徒が寮を利用している。



図 9 国立肢体不自由特別高校ヨーテボリ校の学生寮

## 5. スウェーデンの肢体不自由教育の課題

「スウェーデン肢体不自由の子ども・若者協会 (Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar, RBU)」は約 10,000 名の会員から構成されているが、2015 年に実施した会員への調査によれば、会員の約 20%の肢体不自由児がクラスメートに話しかけることを嫌がられる、歩くのに時間がかかることを嘲笑される、遠足など活動や体育・スポーツに参加することが困難など、学校において不適切な対応を経験していることが報告され、不登校となってしまうケースも少なくないことが指摘されている。

Jarl ら (2020) によるスウェーデンの脳性まひ児の学校成績に関する研究では、1990 年から 1996 年生まれ的基础学校に就学している脳性まひ児 3,465 名のうち、高校進学に必要な成績を満たしたのは 35.7%であったと報告しており (障害のない対照群は 88.4%)、学校成績が顕著に低いことを明らかにしている。また、高校在学中に大学入学のための基礎科目を習得した割合も脳性まひ生徒 68.5%、対照群 75.8%と、脳性まひ生徒が低いことも示している。

ストックホルム市による報告 (Stockholms stad: 2014) では、肢体不自由特別高校卒業生の 50%が「活動補償 (aktivitetsersättning)」のみで生活しており、25%がパートタイムの仕事、フルタイムの仕事に就けているのは 6%に過ぎないことが指摘されている。スウェーデン全体の若者の失業率が約 20%であり、肢体不自由特別高校卒業生が労働市場に参入することが非常に困難になっていることも指摘され、卒業生の多くが「日常業務 (daglig verksamhet: LSS 法に規定された一般労働市場で働くことが困難な障害者向け作業サービス)」にとどまっているのが現状である。

## 6. おわりに

本稿ではスウェーデンのインクルーシブ教育における肢体不自由 (移動障害) 教育の動向について検討してきた。

スウェーデンではインクルーシブ教育が促進されており、肢体不自由児も就学前学校・基礎学校・高校の通常学級での学習が原則とされているが、実際には就学前特別学校、基礎学校肢体不自由特別クラス、基礎学校肢体不自由ユニット、スウェーデン特別ニーズ教育庁が管轄する国立肢体不自由特別高校 (全国に 4 校設置) も必要不可欠なリソースとして維持・整備されている。

高度な福祉国家といわれるスウェーデンにおいても肢体不自由児が学校生活や卒業後の生活で差別・困難を強

いられている実態も明らかにされてきており、特に障害が重い子ども・若者の学校教育や卒後の進路保障は大きな課題として残されている。

そうした問題状況に対して当事者組織の「肢体不自由若者協会」は、「学校における不必要な特別解決策は決して受け入れられるべきではなく、肢体不自由生徒は他の生徒と同じ教育へのアクセス権を持つべきである」「肢体不自由により学校の選択を決して制限してはならない」のであり、とくに「国立高校という特別な解決策は、伝統的な高等教育に対応していないために廃止すべきである」という意見を表明している (<http://ungarorelsehindrade.se/vad-tycker-vi-om/skola-och-utbildning/>)。

「スウェーデン肢体不自由の子ども・若者協会」も 2021 年 8 月に「障害のある子どもが学校への入学を拒否されたり、深刻な組織的・財政的困難に起因する限定的な支援しか受けられないことを認めている現行教育法における差別的例外の廃止」などを求めた緊急声明 (<https://rbu.se/dags-att-alla-barn-far-valja-skola/>) を発表している。

このように当事者組織が肢体不自由の子ども・若者が抱えている学校生活や卒業後の生活の差別・困難をどのように批判し、打開していくのかについて引き続き注目していきたい。

【附記】本稿は高橋の企画提案のもとに、毎週のオンライン研究会において文献レビューと相互の討議により、著者全員で執筆したものである。

## 文献

- Ålidhemsskolan klass för elever med rörelsehinder (オーリッドヘム基礎学校肢体不自由特別クラス): <https://www.umea.se/barnochutbildning/grundskola/stodigrundskolan/klassforelevermedrorelsehinder.4.5d9221f0174f99211466a2.html>
- Degerstedt, F., Björklund, M., Keisu, B.I., Enberg, B. (2021) Unequal physical activity among children with cerebral palsy in Sweden—A national registry study, *Health Science Reports*, 4(3).
- Enebyskolan RH-enheten (エネビー基礎学校肢体不自由ユニット): <http://enebyskolan.blogspot.com/p/rh.html>
- Förbundet Unga Rörelsehindrade (肢体不自由若者協会): <http://ungarorelsehindrade.se/>

Förbundet Unga Rörelsehindrade（肢体不自由若者協会）：<http://ungarorelsehindrade.se/vad-tycker-vi-om/skola-och-utbildning/>

Funka：

<https://www.funka.com/design-for-alla/statistik/>

石田祥代（2003）『スウェーデンのインテグレーションの展開に関する歴史的研究』風間書房。

Jarl, J., Alriksson-Schmidt, A. (2020) School outcomes of adolescents with cerebral palsy in Sweden, *Developmental Medicine & Child Neurology*, 63(4), 429-435

Johansson, S.E. (2009) Pionjärerna: Nedslag i Bräcke Östergårds historia 1958-2008: En Fotobok. Bräcke Östergårds kamratförening.

カール G.アールストレーム他著／二文字理明訳（1995）『スウェーデンの障害児教育改革－特別指導の歴史と現状－』現代書館。

清原舞（2020）『スウェーデンにおける障害者の生活保障－政策・運動・実践－』生活書院。

二文字理明（2019）スウェーデン型インクルーシブ教育の基盤としての法的システム－「分ける」「分けない」の葛藤をめぐる－、『大阪教育大学紀要（総合教育科学）』67, pp.175-185。

小川克正・柳本雄次・石田祥代（1994）スウェーデンにおける肢体不自由児教育－インテグレーション検討委員会報告書を手掛かりにして－、『治療教育研究紀要』15, pp.17-27。

RgRh Stockholm（国立肢体不自由特別高校ストックホルム校）：<https://rgrh.stockholm.se/>

RH-gymnasiet Umeå（国立肢体不自由特別高校ウメオ校）：<https://www.skola.umea.se/skolor/gymnasieskolor/dragonskolan/sidor/studera-hos-oss/rh-gymnasiet-umea.html>

Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar（スウェーデン肢体不自由の子ども・若者協会）：<https://rbu.se/>

Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar（スウェーデン肢体不自由の子ども・若者協会）：<https://rbu.se/dags-att-alla-barn-far-valja-skola/>

Riksförbundet för Rörelsehindrade Barn och Ungdomar（2011）*Årsrapport 2011*.

Riksgymnasiet för rörelsehindrade Göteborg（国立肢体不自由特別高校ヨーテボリ校）：<https://www.riksgymnasietgbg.se/>

Riksgymnasiet i Kristianstad（国立肢体不自由特別高校クリスチヤンスタッド校）：

<https://www.kristianstad.se/sv/barn-och-utbildning/gymnasieskola/gymnasieskolor/riksgymnasiet/>

RN-enheten Turebergsskolan（トゥーレベリ基礎学校肢体不自由ユニット）：

<https://www.sollentuna.se/uweb/rn-enheten/>

Särskilda undervisningsgrupper Ekholmsskolan（エーコルム基礎学校肢体不自由ユニット）：

<https://www.linkoping.se/forskola-och-utbildning/grundskola/kommunala-grundskolor/sodra-skoloradret/ekholmsskolan/om-skolan-ekholmsskolan/sarskilda-undervisningsgrupper-ekholmsskolan/>

Särskild undervisningsgrupp för

elever med rörelsenedsättning（フレードリクスベリ基礎学校肢体不自由ユニット）：

<https://www.linkoping.se/forskola-och-utbildning/grundskola/kommunala-grundskolor/sodra-skoloradret/fredriksbergsskolan/om-fredriksbergsskolan/sarskild-undervisningsgrupp-for-elever-elever-med-rorelsehinder-fredriksbergsskolan/>

Skolverket（2008）Tillgänglighet till skolans lokaler.

Stockholms stad（2014）Riksgymnasiets för rörelsehindrade（RgRh）framtid - lokalisering, inriktning och organization.

Sentenac, M., Ehlinger, V., Michelsen, S.I., Marcelli, M., Dickinson, H.O., Arnaud, C.（2013）Determinants of inclusive education of 8-12 year-old children with cerebral palsy in 9 European regions, *Research in Developmental Disabilities*, 34(1), 588-595.

Welandergatan 37 förskola（ウェランデルガタン 37 就学前教育）：

<https://goteborg.se/wps/portal/enhetssida/welandergatan-37-forskola/valkommen-till-forskolan>

## Trends of Inclusive Education and Education for Children with Physical Disabilities (Movement Disabilities) in Sweden

ISHII Tomoya, ISHIKAWA Izumi,  
TABE Ayako, IKEDA Atsuko,  
TAKAHASHI Satoru